

論文要旨

鹿児島大学

タイトル

Age-Independent Benefits of Postoperative Rehabilitation during Chemoradiotherapy on Functional Outcomes and Survival in Patients with Glioblastoma

本研究は、膠芽腫（Glioblastoma; GBM）患者に対する術後リハビリテーションが、化学放射線療法中の機能的転帰および生存期間に与える影響を、特に年齢に焦点をあてて検討したものである。GBMは最も一般的かつ予後不良の脳腫瘍であり、その治療には外科的切除、放射線療法、および化学療法が標準的に行われる。しかし、高齢患者においては、これらの治療がもたらす副作用のリスクが高く、治療の選択肢が限られることが課題となっている。したがって、高齢患者を含むGBM患者に対するリハビリテーションの有効性を検証することは、治療戦略の重要な一環である。

本研究は、2011年から2016年の間に大学病院において新規にGBMと診断され、標準治療を受けた75名の患者を対象に、後ろ向きコホート研究として実施された。対象患者は、65歳以上の高齢群（ $n = 45$ ）と65歳未満の若年群（ $n = 30$ ）に分類され、いずれの群も術後50日間のリハビリテーションプログラムに参加した。リハビリテーションの内容は、早期の意識レベルの改善から始まり、座位訓練、車椅子移動、最終的には歩行訓練へと段階的に進められた。また、化学放射線療法中の疲労管理も重要な要素とされ、軽度から中等度の有酸素運動や認知機能の改善を図るリハビリテーションが含まれた。

結果として、両群ともにBarthel Index (BI) およびBrunnstrom Recovery Stage (BRS) において有意な改善が認められ、特に早期の歩行訓練と化学放射線療法中の疲労軽減が、退院時のBIに強く影響することが示された。Cox回帰分析により、退院時のBIが生存期間の有意な予測因子であることが明らかとなり（HR 0.98, 95% CI 0.97-0.99, $p = 0.008$ ）、リハビリテーションが年齢に関わらず機能的転帰および生存期間の延長に寄与することが確認された。

これらの結果は、高齢者を含むGBM患者に対してもリハビリテーションを統合した治療戦略が有効であることを示唆している。特に、化学放射線療法の期間中に行われる持続的なリハビリテーションが、患者の機能的独立性および生存期間の延長に寄与する可能性が示された。今後は、さらに大規模な前向き研究により、これらの知見の一般化と治療プロトコルの確立が求められる。

氏名：夏目 恵介

(Journal of Neuro-Oncology 誌 170 巻 号 129-137 頁 2024 年 10 月 掲載)